

日本独自の発展を続けるローファー学生靴

シューフィル たち 城 いっ せい 生

高度成長の1960年代は消費社会とファッション化が加速した時代。メンズではアイビーファッションがブームになり、靴ではリーガルが62年にブランドデビューし、アメリカントラッド独特のラウンドトウの堅牢な紐靴やスリッポンがヒットした。そのアイビー調のスリッポンが、ファッション雑誌などで商品知識が広まるにつれ、アメリカ本国と同様に“ローファー”と呼ばれるようになっていく。

そのローファーの日本初出と思われるのが、ハルタ製靴（現ハルタ）が56（昭和31）年に誕生させた婦人用学生靴（品番308）。前年の55年に実施されたアメリカ靴産業界を視察する「日本製靴業生産性視察団」に参加した同社の春田余咲社長が、渡米先で初めてローファーを見た時に、玄関で靴を脱



1956年、発売当時の「HARUTA」308



発売当初の頃の広告

ぎ履きする日本の文化にマッチするとひらめき、1足購入して日本向けに改良したという。発売当初からハルタ独自のモカ縫い製法の「ランバンモカ」として、他社の学生靴をしのぐ人気商品となった。

そして、高校進学率の上昇（55年51.5%、60年57.7%、65年70.7%、70年82.1%、75年91.9%、80年94.2%）と共に学生靴全般の需要が増加、メーカー各社は競って商品研究・開発に力を入れた。60年代にはアイビーブームに乗ってタウンシューズ

としてもローファーは広まっていく。特に、女子高生の制服がセーラー服からブレザー型に変わっていった70年代以降は女子高生の制靴＝ローファーが圧倒的になり、競合商品が増え、品質・機能も多様化していく。今やローファー学生靴は日本独自の通学ファッションアイテムとして世界的にも注目される存在に。

ローファー学生靴は、その後、90年代のルーズソックス時代には分厚いソックスに対応する3Eタイプ、制服のファッション化にフィットする「おでこローファー」、美脚ブームに合わせた5cmヒールローファー、スニーカー世代に向けたカップインソール装着タイプなど、さまざまな靴が製作されるようになった。

ハルタは現在、韓国・中国・香港・台湾など東アジアを中心にローファー学生靴の海外への輸出も行う数少ない会社の一つとなっている。



1960～70年代、学生靴に注目が集まった。

（共に「東京靴通信」1966年12月15日号）



1966年当時の靴メーカーの学生靴広告。ローファーよりカッタータイプが多かった。